The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	織田作之助『人情噺』論
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2019, 53, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81483
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

織田作之助『人情噺』論

斎藤　理生

キーワード：美談／不死身／影絵／耳袋／夕刊大阪

一　改題された小説――『影絵』（『不死身』）に触れつつ

本論では、織田作之助の『人情噺』という短篇を、その典拠となった作品を踏まえて分析する。分析を通じて、一篇の新たな読みを提示すると共に、作之助の創作方法の一端を明らかにすることが目的である。

『人情噺』は、一九四一年三月一四日、「夕刊大阪」に『美談』という題名で発表されたという。浦西和彦編『織田作之助文藝事典』[1]、山内乾史「織田作之助著述一覧稿（Ⅰ）～（Ⅳ）」[2]、関根和行『増補版　資料織田作之助』[3]など、先学による年譜や著作目録において、いずれも未確認とされながらも、そのように指摘されてきた。また、二〇一六年度に遺族から大阪府立中之島図書館織田文庫に寄贈された作之助の一九四一年の日記にも「三月六日　夕刊大阪小説十四枚「美談」脱稿」および「三月一四日　夕刊大阪に「美談」のる」という記述がある。

「夕刊大阪」は当時作之助が勤めていた夕刊大阪新聞社から発行されていた新聞である。大谷晃一によれば、作之助は「記者本来の仕事はさっぱりせず、こういうものを文芸欄にときたま素早く書いては、お茶をにごし」ていたと

いう。[4] 前述した一九四一年の日記の近い時期には、「二月一二日　夕刊大阪新聞四面小説「昔男ありけり」「ネゴトスキーが訴へられた話」掲載」という記述も見出せる。そのため「夕刊大阪」には、他にも今では知られていない作之助の作品が掲載されていた可能性が高い。しかし調査の限り、当時の「夕刊大阪」は現存しておらず、実物を見ることはかなわない。わかるのは、『美談』が作之助生前に『漂流』（輝文館、一九四二）に収録されたこと。また戦後『人情噺』（ぐらすぷ・らいぶらり、一九四六）に収録された際に『人情噺』に改題されたことである。なお、この再録の際に変化したのは題名だけで、本文に大きな異同はない。

作之助には他にも、戦中に発表された後、戦後に改題されて収録された作品がある。たとえば従来、初出不明とされてきた『影絵』である。この小説は、もともと『不死身』という題名で「健康文化」（一九四三・一）に発表されていたことがわかった。

「健康文化」は、一九二三年から日本通俗医学社によって、「通俗医学」として出版されていた雑誌が、一九四二年九月に改題されたものである。作之助は同年一二月号に「養生式と長者丸」という随想を寄稿している。その号の「健康文化後期」（ママ）には「織田作之助先生にも忙中を煩はしてしまつた。正月号にも力作を戴けることになつた」とある。この「力作」が『不死身』であった。「健康文化」一九四三年一月号には表紙にも作之助の名前と『不死身』が印字されている。「健康文化後記」には、「約束通り織田先生の御力作を披露する。「小説などはどの雑誌にでも……」と云はれる読者は先づ作品を玩味せられたい。そして「成程々々」と頷かれることだ。「健康文化ならでは……」の創作――と分つたら編輯子の意図に讃を送られる前に不死身の先生の御厚意に感謝して戴きたい」と記されている。肺を病んでいる鈴木という青年が、鬱屈した生活を送りながらも、小さなきっかけから健康な生活へと歩み出してゆくという『不死身』の内容が、「健康文化」という雑誌にふさわしいと判断されたことがわかる。[5]

『不死身』は戦後になって『素顔』（瑤林社、一九四六）に収録された際に『影絵』と改題された。『不死身』冒頭の一文が削除されている以外、本文に目立った異同はない。冒頭の一文とは、「支那事変のはじまる少し前頃、肺を病んでゐたある青年の話である。」というものである。先に述べたように、『不死身』及び『影絵』の主人公である鈴木は、最終的には健康な生活へ立ち直ってゆく。しかし作品の大部分では、肺を病んでいるのに陰気な下宿に住み、医者の診察も忌避しているなど、不健康な生活を送っている。そのような鈴木の退廃的なふるまいが、戦時下において時局にふさわしくないと判断されることを危惧して、『不死身』にこのような一文が用意されたのであろう。また、だからこそ戦後の『影絵』には必要なくなったのではないか。題名の変更も、時局への配慮がうかがえる『不死身』から、光と影との対比が作品世界を形作っている内容に見合った『影絵』に変更されたのだと思われる。

『人情噺』の場合、ただ新聞紙面の埋め合わせとして書かれた作品ではなく、発表の翌年と戦後になってからと、二度にわたって短篇集に収録されていること、特に後者では表題作とされていることから、夕刊紙に載せた作品のなかでも自信作であったと推測される。本論ではさしあたりこの作品を『人情噺』と呼び、考察していきたい。

二　『人情噺』の構成と『耳袋』

『人情噺』の同時代評としては、「新刊紹介　「人情噺」織田作之助著」[6]がある。著者の「吉井生」は、作之助の高津中学時代からの友人であり、この時期には大阪日日新聞社に勤めていた吉井栄治と見て間違いあるまい。吉井は「出世作「夫婦善哉」直後の「子守唄」にはじまり「許嫁」「人情噺」「家風」と四つの短篇、大阪庶民の風俗人情を描いて作者独自の世界を一応完成させた時代の作品である」と位置づけている。青山光二は「漂流――織田作之助」[7]

という『漂流』の書評を書いており、作品集中の複数の作品に言及しているが、『美談』には触れていない。ただ後に全集の解説で、『人情噺』について「永い時間をかけた、夫婦ぐらしといういとなみのあわれさ、めでたさに、庶民の作家の暖い眼がそそがれている。人間への省察の深まりが読みとれる好短編」と評価している。[8] また、大谷晃一は「三十年間、一軒の風呂屋の釜焚きをしている実直な男の、ふとおこしたはかない悪心と、永年の妻との間の心の機微を描いて、捨てがたい」と評価している。[9] 近年は、北村薫・宮部みゆき編『名短篇ほりだしもの』[10]や紅野謙介・清水良典編『高校生のための近現代文学ベーシック　ちくま小説入門』[11]といったアンソロジーにも採りあげられ、北村が「気持ちのいい話」と述べるなど、[12] 好評価を得ている佳品である。しかしこれまで本格的に考察されたことはなかった。

『人情噺』は四つの部分で構成されている。①三右衛門は一八歳で和歌山から大阪に出て来た。風呂屋に雇われ、三平と呼ばれるようになった。最初は下足番をやり、二一歳から風呂の釜を焚く仕事を受け持った。②律儀に勤め、一三年経ち、主人の世話で女中と結婚した。しかし生活はほとんど変わらなかった。三平が朝三時に起きて釜を焚き、女中が七時に起きて下足番をする生活が一五年続いた。③ある日、三平は主人の使いで大金を預かって銀行に行ったまま帰ってこない。いよいよ逐電したのかと人々が思った翌日の昼に三平は戻ってきて、主人に金を渡し、暇をくれという。大金を手にして、ふと魔が差して逐電しかけたが、思いとどまって帰って来たのだった。主人はその正直さに感心し、暇を出さなかった。④夫婦はその後も勤勉に働き続けた。ところが入浴時間が改正され、早起きして働く必要がなくなった。五一歳と四三歳になった夫婦は、二人で睦まじく過ごす時間を得た。

この①から④は、いわゆる起承転結で成り立っている。①で発端となる物語の主人公と舞台とが提示され、②でその内容が継続・展開し、③で意外な出来事が起こり、④でまとまりを得ているからである。こうした構成は、やはり

『漂流』に収められている『動物集』（「大阪文学」一九四二・一）の一つである「馬地獄」に似ている。[13]

「馬地獄」については、そのすべてが作之助の創作ではなく、〈転〉に当たる部分に典拠と思しき書物があったことを指摘したことがある。[14] 実は、『人情噺』の〈転〉に当たる部分にも、典拠と思しきものがある。江戸時代中期から後期にかけて、根岸守信（鎮衛）がさまざまな人々から聞いた興味深い話を書き留めた随筆集『耳袋』巻之三の「下賤の者は心ありて召使ふべき事」という話である。

この話は「或人年久しく召使ひける中間あり。あくまで實躰にて心もまた直なる者なりしが、或年主人御藏前取にて御切米玉落ちける故、金子請取りに右札差の元へ行くべき處しつらひ有りて行かず、彼者に手紙相添へて金請取りに遣しけるが、其日も暮れ夜に入りても歸らず」というところから始まる。[15] 実直に思われていた使用人が、大金を受け取ったあと姿を消して、次の日まで帰ってこないという部分が『人情噺』と一致している。

続いて「翌朝にも歸らざれば扨は金子請取り出奔なしけるか、數年召仕ひて彼が志を知りたるに出奔などすべき者にあらず、然しとて人を遣しみけれ共見えざれば出奔致せしなるべし、人は知れざるものと大きに後悔なしけるに」とあって、これは「翌朝になつても三平が帰らないとわかると、主人はもはや三平の持ち逃げを半分信じた。金のこともあつたが、しかしあの実直者の三平がそんなことをしでかしたのかと思ふのが、一層情けなかつた。人は油断のならぬ者だと、来る客ごとに、番台で愚痴り、愚痴つた」という部分と一致する。

さらに「晝過にも成りて彼者歸りて懐中より金子并に札差の書附とも取揃へ主人へ渡しける故、如何致し遅かりしやと尋ければかの下人申しけるは、私には暇を賜るべしと言ひける故、彌々驚き如何なる事やとて詳しく尋ねければ」という展開も、両作品は一致している。

そして、この作品の山場である③の三平の主人への告白を改めて確認しておこう。

――今後もあることだが、どんな正直者でも、われわれのやうな身分のものに千円の金を持たせるやうな使に出すのは、むごい話だ。

自分はかれこれ三十年ここで使うてもらつて、いまは五十近い。もう一生ここを動かぬ覚悟であり、葬式もここから出して貰ふつもりでゐたが、昨日銀行からの帰りに、ふと魔がさしました。

つく〴〵考へてみると、自分らは一生貧乏で、千円といふやうな大金を手にしたことがない。此の末もこんな大金が手にはいるのは覚つかない。この金と、銀行の通帳をもつて今東京かどこかへ逐電したら一生気楽に暮せるだらう。

さう思ふと、えゝもうどうでもなれ、永年の女房も置逃げだと思ひ、直ぐ梅田の駅へ駆けつけましたが、切符を買はうとする段になつて、ふと、主人も自分を実直者だと信じて下すつたればこそ、かうやつて大事な使ひにも出してくれるのだ。その心にそむいては天罰がおそろしい。女房も悲しむだらうと頭に来て、どうにも切符が買へず、帰るなら今のうちだと駅を出て、それでも電車に乗らず歩いて一時間も掛かつて心斎橋まで来ました。

橋の上からぼんやり川を見てゐると、とにかくこれだけの金があれば、われわれの身分ではもうほかにのぞむこともないと、また悪い心が出て来ました。

そして梅田の駅へ歩いて引きかへし、切符を買はうか、買ふまいか、思案に暮て、たゝずむ内に夜になりました。

結局、思ひまどひながら、待合室で一夜を明し、朝になりました。が、心は決しかね、梅田のあたりうろ〴〵してゐるうちに、お正午のサイレンがきこえました。

腹がにはかに空つて、しよんぼり気がめいり、冥加おそろしい気持になり、とぼ〴〵帰つて来ました……。

この三平の告白もまた、次にあげる『耳袋』巻之三の「下賤の者は心ありて召使ふべき事」という話と、ほぼ一致するのである。

此後もあるべき事なり、如何程律儀にて年久しく召仕ひ給ふとも、中間などに金子百両など持たせべきものにあらず。我等事數年御懇意に召仕ひ給ひて我等も奉公せん内は此屋敷出ずと存じけるが、昨日札差にて金子百両程我等請取りて歸る道すがらつく〴〵存じけるに、我等賤しく生れて是迄か程の金子懐中なしたる事なし。此末か程の金子手に入るゝ事あるべきや計り難し。今盗取りて立退かば生涯は暮し方成るべしとて、江戸表を立退き候心にて千住筋迄至り大橋を越して段々行きしが、熟々考ふれば主人も我身實躰なる者と見極め給へばこそ大金の使にも申付け給へり。然るを是迄の實躰に背き盗せんは天命主命恐るべし愼むべしとて又箕輪迄立歸りしが、又悪心出て、兎角に世を渡る事百金あれば其身の分際には相應なりとて又々立戻り、或は思ひ直してたゝずみなどして、昨夜は朝迄も心決せず迷ひしが、幾重にも冥理の恐しさに善心に決定して今立歸りぬ。かゝる悪心の一旦出し者召使ひ給はんも由なければ暇を賜るべしと言ひしに、主人も彌々感心して厚く止めて召仕ひけると也。

なるほど舞台は近世の江戸から昭和の大阪に変わっている。そのため地名のちがいや鉄道の有無など、細部には差異がある。しかし、長年働いて信頼を得てきた実直な使用人が、主人の使いで思わぬ大金を手にして、貧しい自分がこれほどの大金を得ることが今後あろうかと思ってしまい、そのまま逃げようとする。しかし主人の信頼に気づき、一度は思い直し、途中まで引き返すものの、再び悪心が兆し、翌朝まで心を決しかねたが、最終的に帰って来る。男はその思いを主人に打ち明け、暇をくれというが、主人はかえって信頼する、という主な筋は一致している。

また、作之助の蔵書が所蔵されている大阪府立中之島図書館の織田文庫には、右に引用した巻之三が入っている『耳袋』の岩波文庫の上巻が収められている。さらに、作之助には他にも『耳袋』を活かして作ったと思しき作品がある。[16] したがって、作之助は『耳袋』の一話を活かして短篇を作り上げたと見て間違いあるまい。一篇の軸となる主人公の事件と心の動きは、作之助の着想ではなかったのである。

もちろん、先行する作品に多くを負っているからといって『人情噺』の価値が落ちるわけではない。むしろ両作品を比較することで、作之助の小説の特徴が浮かびあがる点が重要である。その際、『人情噺』は③だけで構成されているわけではない、という事実に改めて立ち返ることが有効であろう。

三　『人情噺』の仕組み

『人情噺』では、まず①と②において、『夫婦善哉』（「海風」一九四〇・四）をはじめとする、作之助が前年までに多く書き、作品集でも言及した「年代記風の小説」または系譜小説の手法を使われている。[17] すなわち、三平が罪を犯すまでの実直な男としての背景が、足早に読者に伝えられるのである。「年中夜中の三時に起された。風呂の釜を焚くのだ。毎日毎日釜を焚いて、もうかれこれ三十年になる」という『人情噺』の冒頭は、『夫婦善哉』の冒頭の「年中借金取が出はいりした」を想起させる。また、『夫婦善哉』が「節季はむろんまるで毎日のことで、醤油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だつた」と続くのと同じように、『人情噺』でも三文目で「毎日毎日」とくり返されている。何度もあった出来事を一回で語る、括復法的な表現がたたみかけられているのである。

この工夫は、やはり織田文庫所蔵の「人情噺」の草稿を確かめることで、より明瞭になる。『人情噺』の草稿は一二枚ある。そのうち冒頭の部分を書いている原稿が二種類ある。時間的な順序がはっきりしているわけではないが、今それぞれの草稿を仮にAとBとして、先にあげた初版本および再録本の本文（完成形）と比較したい。

夜中の三時に三平は起される。風呂の釜を焚くのだ。毎日毎日さうして、かれこれもう二十年になる。（A）

夜中夜中の三時に起される。風呂の釜を焚くのだ。毎日毎日釜を焚いて、もうかれこれ三十年になる。（B）

ここには完成形に至るプロセスがうかがえる。作之助は第一に、勤労年数を十年延ばすことで、三平の積み重ねてきた経験や信頼を増やしている。第二に、書き出しに括復法を取り入れることで、夜中の三時に起こされる日常が延々と続いてきたことを表している。草稿Aにも「毎日毎日」はあったが、Bで「夜中夜中」が加わり、完成形で「年中」と書き加えられることで強調されている。「釜を焚く」と書いた直後に「さうして」と表現していたのを、あえて「釜を焚」くと同じ言葉をくり返すことにしたのも、具体的な行動を介して、同じことを絶えず続けている印象を強めることに役立っている。第三に、「三平は」という主語を省略したまま短文を積み重ねることによって、三平のせわしない日常が読者にも感じられやすい仕組みになっている。

一般に、系譜小説では素早く時間が流れる。そのため、その時々の人物たちの内面がくわしくは語られない。三平の場合も、職に就いた直後、慣れない下足番をやらされて「悲しいと思つた」ことは語られている。しかし「直ぐ馴れて、客のない時の欠伸のしかたなどもいかにも下足番らしく板について、やがて二十一になつた」と足早に語られる。三平が「悲しい」気持ちを克服していった過程は取りあげられない。続く「その年の春から、風呂の釜を焚かさ

れることになつた。夜中の三時に起されてびつくりした眼で釜の下を覗いたときは、さすがに随分情けない気持になつたが、これも直ぐ馴れた」という部分も同様である。落ちこんで、馴れてという経緯が一文にまとめられているために、読者が三平に同情する余地は少なくなっている。また、右の引用に続いて「あまり日に当らぬので、顔色が無気力に蒼ざめて、しよつちゆう赤い目をしてゐたが、鏡を見ても、べつになんの感慨もなかつた。そして十年経つた」と一気に長い時間が経過させられる。「なんの感慨もな」いことは、必ずしも何も考えていなかったことを意味しないはずだが、息もつかせず語られるために、三平の内面は顧みられなくなりやすい。さらに、「まる十三年一つ風呂屋に勤めた勘定だが、べつに苦労して辛抱したわけではない。根気がよいとも自分では思はなかつた。うかうかと十三年経つてしまつたのだ」とも語られるために、三平は細かいことを気にしない人物のように受け取られる。このように、語り手は三平をただ実直な男だと思って読んでゆくように、読者を誘導しているのである。

主人夫婦は三平に対して「よう勤めてくれる」と思いながら「目立つて可愛がつたわけでもない」。「いぢらしく」思い、「国元の両親がなくなつたいまは、いはば自分たち夫婦が親代りだ」と思うことはある。しかし彼らにとって三平は、日ごろから河豚の毒味をさせるような扱いをしている使用人でもある。「てんで誰にも相手にされぬ女中」を結婚相手の候補とするとき、主人は「なんぼなんでも…」と思いながら「三平が可哀相だとは、しかし深くも思はなかつた」とされる。先に述べた、主人公として三平に着目させながら、彼の内側の葛藤に思いを馳せさせにくい語りの構造は、読者をこうした主人夫婦の立場に近づけてゆく。

織田文庫に所蔵されている草稿に、主人に「せめてどこぞ近所で二階借りしイな」と言われたが「断つた」という逸話に続いて「ひとびとは夫婦の仲をあやしんだ。あるひは夜中、湯殿のなかで会うてゐるのではないかと、思ふものもあつた」と書かれた後に、二重線で消されている一枚がある。三平と女中との夫婦仲に対する周囲の憶測が、一

度書かれた後で抹消されているのである。それは、このような邪推が戦時下に、また「美談」という題の作品にふさわしくないと判断されたためであろう。だが同時に、周囲はあくまで三平を裏表のない実直者と思っていることを示すため、また三平に人々の知らない面がある可能性を読者に考えさせないための措置でもあったにちがいない。

ただ改めて読み直すと、本文には、一連の苛酷な業務に取りかかり始めた直後には、三平も「悲しいと思つた」り「情けない気持になつた」りしていたことが、手短にとはいえ語られている。このような三平の感受性に、わずかとはいえ言及していたことが、後に伏線として効いてくる。

一篇においては、③で大金を持ったまま行方不明になった三平が翌日の昼に帰宅し、主人に魔が差しかけたことを打ち明ける部分が山場になっている。その失踪して帰って来たときの告白で、周囲に「あくまで正直一途の実直者だ」と思われていた男が抱えた葛藤が浮かびあがる。主人や妻の女中だけでなく、読者も三平を見誤っていたことに気づかされる。機械のように働いていた三平にも複雑な思いがあったこと。それは本文で示されていたにもかかわらず、つい見過ごされがちであった。そうすることによって、長いあいだ接してきたにもかかわらず、三平への配慮を怠りがちであった物語世界の人々と読者とが同じ思いを抱く仕組みになっているのである。

青山光二は前掲「作品解題」で、「三十年間、おなじ風呂屋の釜を焚いている実直一途な男が主人公。銀行へ大金をおろす使いに出され、悪心を起すが、けっきょく金には手をつけずに帰って来るということで、主人公の実直さは、さらに強調される」と述べている。ただ、事件の前後で三平の〈実直さ〉への信頼は変化している。事件を通して、三平も欲を持たぬ人間ではないことがわかった。ただ同時に、その欲を抑制できること、欲を抱いたことを素直に打ち明ける性質も明らかになった。だから「主人はすつかり感心して、むろん暇を出さなかつた」のである。

四　『人情噺』の結末――夫婦の物語

先にも触れたように、『耳袋』と比較すると、江戸から逃げようとする話が、『人情噺』では大阪から「東京かどこかへ逐電」しようとする話に変わっている。これは作之助が大阪に慣れ親しんでいたという理由だけでなく、初出である「夕刊大阪」の読者への配慮でもあっただろう。時間的には後になるが、織田文庫には、戦後「夕刊新大阪」に勤めていた井葉野篤三からの「大阪を舞台にしたもの特に結構です」と書かれた短編の原稿依頼が残っている。[18] 大阪の新聞に載せる小説は、大阪を舞台にしていることが望ましい。そのことは、夕刊大阪新聞社の社員であった作之助にはよく自覚されていたはずである。三平が行く先に迷い、梅田と心斎橋を行ったり来たりするのも、「夕刊大阪」の読者にとって御堂筋は親しみやすいからであろう。

くわえて、登場人物のその後である④を描いていることが、『耳袋』とは異なる『人情噺』の特徴である。『耳袋』では一人の男の物語だったのが、夫婦の物語にされている。それぞれの仕事一辺倒だった夫婦が、物資不足で風呂屋の開店が遅くなったことをきっかけに、二人だけの時間を得てゆく話が加わっている。始業前の時間が長くなり、「随分退屈した二人は、ときどき話し合ふようにな」り、やがて「いつ見てもひそ〳〵と語り合つてゐ」るようになる。その意味で『人情噺』は、作之助が書いたもう一つの〈夫婦善哉〉だと言える。

夫婦が睦まじくなってゆく物語であるために、最初の段階においては、二人の間には隔たりがある。②において、三平が女中との結婚を斡旋される場面に注意したい。

「なんぼなんでも……」

三平が可哀相だとは、しかし深くも思はなかつたから、三平を呼び寄せて、こんどは叱りつけるやうな調子で、

「貰つたらどないや」

三平はちよつと赤くなつたが、直ぐもとの無気力に蒼い顔色になり、ぺたりと両手を畳の上について、

「俺の体は旦那はんに委せてあるんやさけ、旦那はんのいふ通りにします。どなえな女子でもわが妻にしちやります」

と、まるで泣き出さんばかりだつた。

三年前に「笑ひながら嫁の話をもち掛け」られたときには、三平は無言で「ぷつとふくれた顔をした」という。三平は、「女嫌ひ」なのか、それとも笑いながら持ち出されたのが気に入らなかったのか、何らかの理由で縁談を拒んでいる（拒否の反応を示すことができている）。しかし、引用部では、主人が「叱りつけるやうな調子」で持ち出しているため、三平は反対できない。主人の命令に逆らわぬ三平の実直さが強調される場面であるが、ここで彼の内面が押し殺されている点は無視できまい。「直ぐもとの無気力に蒼い顔色にな」って答える前には、別の感情があったと推測される。小田島本有が指摘するとおり「決して三平自身が望んだ結婚ではなかった」[19]のである。

なるほど「ちよつと赤くなつた」のは、女中への好意や結婚への恥じらいからだと解釈できないことはない。が、結婚後も別の部屋で寝て、妻の「活動へ行こら、連れもて行こら」という誘いにも乗らない三平に、そのような相手への強い思いはうかがいにくい。縁談そのものへの含羞でもあるまい。前回の縁談の際に同じ反応がないからである。だとすれば、ここで三平が「赤くなつた」のは、「てんで誰にも相手にされぬ女中」を押しつけられることへの不満であったのではないか。それは女中その人に対する嫌悪感というより、彼女にはお内儀さんが「三平を見る眼がどこ

か違ふ」と気遣っているにもかかわらず、三平には配慮を欠いている失望でもあったろう。その思いは「直ぐもとの無気力に蒼い顔色にな」ることで抑制される。しかし「どなえな女子でも」という投げやりな言い方には、三平の不満がにじみ出ているように見える。

これまでに述べてきたように、①②の段階で三平の内面はほのめかされている。にもかかわらず、主人第一の実直さが際立つゆえに、主人夫婦も読者も、押し殺された三平の内面に気づきにくい仕組みになっているのである。それが③において効果的に機能する。魔が差したのはこれが初めてであっても、三平は何も考えていない人物ではなかった。そもそも「一戸をもたしてやろうかといつたが、三平はきかなかつた」。また「せめてどこぞで二階借りしイな」と言われても「断つた」。三平は、いつも主人に従ってきたわけではなかったのである。

『耳袋』においては、ただ実直と思われていた男にも人並みの欲望はあったこと、しかしその欲望に引きずられない点でやはり実直であったということがわかるという点が面白みになっていた。『人情噺』の場合、くわえて、結にあたる④の夫婦が睦まじくなってゆく部分が重要である。

三平はそれまでと同じように生きようとする。しかし時局を反映して制度が変わり、制度の変化に伴う仕事の変化が夫婦に時間を与え、夫婦の関係をも変えてゆく。一九三九年八月三〇日付「東京朝日新聞」に掲載された「銭湯に受難時代！」という記事では、「事変以来燃料の暴騰から経営難に陥つた銭湯は去る六月以来警視監保安部の要望で一斉に朝風呂を廃止、其後石炭の入手難、雇人不足等に拍車をかけられて去る七月七日再び営業時間を短縮―午後二時開場夜十二時消燈の申合せを行つた」ことが報じられている。風呂の時間が制限されるのは、人々にとって不便である。しかしそのことをきっかけに、人間関係が良好になる場合もある。三平の実直さばかりでなく、自由が制限される中で、その肯定的な面を捉えた格好のこの小説の末尾は、まさに時局にふさわしい「美談」となる。

単行本『漂流』では、当時の新聞にふさわしい時局に関わる効果は薄れているだろう。『美談』という題名ではなくなった戦後の『人情噺』でも同じである。ただ『人情噺』という題名にふさわしい要素は一篇に内在していた。

この作品の④が重要なのは、①から③で実直な男の内面の機微を人々が軽視していたことがわかることに加えて、④で三平も妻の心情を軽視していたことが明らかになるからである。先にも述べたように、三平は妻に映画を一緒に見に行こうと誘われてもすげなく断る。魔が差して逐電しようとしたとき、「女房も悲しむだらう」と、主人だけでなく女房への思いが出て来ている点は『耳袋』にはなく、そこに『人情噺』の特徴があると見る小田島本有前掲論の指摘は首肯されるが、この時点では「また悪い心が出て来」るのを止める力はない。しかし事件後、制度の変化がきっかけとはいえ、距離を縮めてゆく二人からは、共に人生を歩もうとしていることがうかがえる。

末尾で女房は「三平の白髪を抜いてやつてゐる」。これ以前に「そして十五年経つた。夫婦の間に子供も出来なかつたが、三平は少し白髪が出来た。五十に近かつた」と語られているように、この作品において白髪は年月の経過を示す指標となっている。その白髪を抜いてもらうことで、風呂屋の始業時間が遅れていること。それは三平が忙しなく働き続けてきた使用人としての時間から、個人としての慰安の時間へと移りつつあることを示しているのである。

［注］

（1）和泉書院、一九九二

（2）「近代」一九九五・九～一九九七・三

（3）日本古書通信社、二〇一六

（4）『織田作之助――生き愛し書いた』（沖積舎、一九九八）一九五頁

（5）ただし前述した作之助の一九四一年の日記には、「三月二〇日　小説「不死身」」、「四月四日　「不死身」（四十四枚）脱稿」、「四月一四日　「文學界」へ「不死身」送る」、「九月三〇日　「不死身」を改題「道」に」といった記述が見つかる。したがって、「不死身」は元々「文學界」の原稿依頼に応えて執筆されたが、なんらかの事情で掲載されず、改稿されたものが「健康文化」に掲載されたのだと推測される。

（6）「大阪日日新聞」一九四六・六・二三

（7）「新創作」一九四二・一一

（8）「作品解題」（『定本織田作之助全集　第三巻』文泉堂出版、一九九五）

（9）大谷前掲書、一九五頁

（10）筑摩書房、二〇一一

（11）筑摩書房、二〇一二

（12）「解説対談」（『名短篇ほりだしもの』三五三頁）

（13）宮川康「織田作之助「馬地獄」の教材性――現代文分野における「大阪の文学」の教材として――」（「大阪教育大学附属学校池田校舎研究紀要」一九九五・三）参照。

（14）拙論「織田作之助「馬地獄」の方法――北尾鐐之助『近代大阪』を手がかりに」（「國語國文」二〇一一・一二）参照。

（15）引用は、織田文庫に所蔵されている根岸守信編（柳田国男、尾崎恒雄共校訂）『耳袋』上巻（岩波書店、一九三九）に拠った（織田文庫―５６９）。

（16）織田作之助が『耳袋』から創作のアイデアを借りていたことは、拙論「【資料紹介】織田作之助新資料「俄法師」とその周辺」（「昭和文学研究」二〇一六・三）でも指摘した。また、紙幅の都合上ここで詳細な比較はできないが、長篇『異郷』（一九四三）にも『耳袋』が用いられている。主人公の伝兵衛が「子供の頃から勇気のある男だつた」ことの証として紹介されている逸話が、『耳袋』の巻之二「浪速任侠の事」という話と酷似しているのである。なお、織田文庫に所蔵されている岩波文庫の上巻の目次には、この話の上に丸印が付いている。おそらく作之助が、自作に活用しようと備忘のためにチェッ

クしていたものであろう。

（17）一九四〇年ごろに流行していた系譜小説と『夫婦善哉』に関しては拙稿「織田作之助『夫婦善哉』の「形式」――「系譜小説」を手がかりに――」（「日本近代文学」二〇一三・一一）を参照されたい。

（18）一九四六年二月二一日付。この依頼に応えたのが『注射』（「夕刊新大阪」一九四六・三・三）であろう。

（19）『高校生のための近現代文学ベーシック　ちくま小説入門』解答編、四六頁

〈付記〉　本研究はJSPS科研費17K02450の助成を受けたものである。

（文学研究科准教授）

SUMMARY

A Study of ODA Sakunosuke's "Ninjōbanashi"

Masao SAITO

ODA Sakunosuke (1913-1947) was one of the most prominent novelists in Osaka during 1940s. This paper attempts to analyze ODA's short novel 'Ninjōbanashi (人情噺)'. I would compare this novel with the work which is regarded as its source. The purpose of this study is to present a new interpretation of 'Ninjōbanashi' and to clarify a part of ODA's creative method through this analysis.

In this paper, I have first divided the 'Ninjōbanashi' into four parts. Further, I have argued that one of the essays of 'Ear Bag (耳袋)', a zuihitsu (Collection of essays) by NEGISHI Morinobu (1737-1815), of the Edo period, was used for the climax part of the novel. By the order of his master, a servant who was entrusted with a large amount of money, tried to flee far away along with that money. But he turned back halfway. The man apologized to his master and asked for his own dismissal. The master, on the contrary, trusted the man's honesty. This plot was used in both 'Ninjōbanashi' and 'Ear Bag'. The fact that ODA read 'Ear Bag' can be seen from his collection of books in Osaka Prefectural Nakanoshima Library.

Then, how did ODA devise his own way in 'Ear Bag'?

First of all, in the beginning of the novel, ODA intentionally made the inner feelings of the honest man difficult for readers to understand. This made the scene of the man confessing his inner feelings more shocking.

Secondly, ODA changed the story of Edo of the Edo period into Osaka of the Showa period. Accordingly, he made the contents of the novel familiar to the newspaper's readers (This novel was published in a newspaper published from Osaka).

The original title of this novel was "Fine Story (美談)". The plots; protagonist working diligently for more than 30 years, the act of committing a crime but refraining from it and confessing the crime prove the sincerity of the man. These seemed suitable under the title "Fine Story" during the war.

In addition, ODA added an anecdote at the end of his novel that the man became much closer with his wife. According to this conclusion, the post war title of the novel was rightly called 'Ninjōbanashi'.